

石破茂氏、5回目の挑戦で総裁

立憲民主党は野田元首相

政治アナリスト
元杏林大学教授

豊島典雄

石破氏、辛勝

9人が立候補した自民党総裁選挙は決選投票で石破茂元自民党幹事長が選出され、第28代総裁に就任した。5回目で金的を射止めたのである。石破丸のスタートである。まずは衆院解散、総選挙での勝利の確保である。

幹事長等の要職を歴任した石破氏だが、自民党所属の国会議員の支持は強くない。だから、党内への統率力には不安がある。

そして、総選挙後の国会で、いわゆる裏金問題で、国民の納得を得られる政治改革案を成立させられるかである。政治への信頼回復が喫緊の課題である。旧文通費の使途公開、政策活動費の廃止問題等を中心に、政治改革、自民党改革である。そして、

①実質賃金の上昇の継続でデフレ脱

却宣言をして、失われた30年からの脱却を実現できるか。

②米大統領選が11月にあるが、ハリス氏よりトランプ氏のほうが対応が難しい。米国の新政権と早期に接触し、日米関係を良好に保ち、習近平政権を牽制し、東アジアの平和と安定を確保する必要がある。

全局に命令を発する権力

9月27日の自民党総裁選は、1回目の投票では、石破茂氏154、高市早苗氏181、小泉進次郎氏136票だった。

決選投票では石破茂氏215票、高市早苗氏が194票。石破氏の辛勝だった。しかし「一輪咲いても花は花」だ。辛勝でも勝ちも勝ちである。

石破氏は「全局に命令を発する権力」を得たのだ。

日本国首相の座を目指して、自民

党総裁選で9人の熾烈な戦いが展開された。彼らが手に入れようとしたのは端的に言えば「全局に命令を発する権力」である。

第2次世界大戦中のイギリスの首相に、1940年5月10日に就任したチャーチルの著書『第2次世界大戦』（河出文庫第1巻）に

「5月10日の夜、私は一国の首相としての権力を握った。ついに私は、全局に対して命令を発する権力を握ったのである。私はあたかも運命とともに歩いているように感じた。そしてすべての私の過去の生活は、ただこの時、この試練のための準備にすぎなかったように感じた」とある。

石破首相は、自民党総裁選の投票日である9月27日夜、全局に対して命令する権力を掌握、「はるげくもきつるものかな秋の原」（中曽根康弘首相）の感慨にひたつたのではないか。

石破総裁への不安

石破茂氏は、いつも斜に構えている自民党内評論家ともいうべき立ち位置で、左派には評判が良く、いわゆる世論受けはする。しかし、「後ろから弾を撃つ」「肝心な時に逃げた（離党）」とか党内の評判は芳しくない。

特に、保守派からの批判は強い。無派閥代表のようなスタンスでいながら、派閥を作る。しかしながら保てなかった。指導力に不安が残る。

信念と政策通の高市早苗氏であるが、人（国会議員）付き合い不足が指摘されていた。議員票が伸びない背景であろう。応援団長の安倍晋三元首相がいなかったのが痛かった。また、左派系メディアからは「高市早苗氏が首相になれば、中韓との関係に懸念がある」「アメリカとも上手くいか」と足を引っ張られた。

野田元首相が新代表

野党第一党の立憲民主党代表は野田佳彦元首相になった。立憲民主党関係者は私に「野田元首相は床の間が似合う。安定感がある」「立憲民主党には自民党の悪口ばかり言っているというイメージがある。野田さんは人の悪口を言わない。野田さんは保守票を取れる。自民党にとっては戦いにくいでしょう」と言っている。

野田新代表は論客である、その演説には聴かせるものがある。特に、世襲政治批判には頷けるものがある。

野田新代表はかねてから「閣僚のほぼ半分が世襲で異常な事態だ」とし、世襲制限の実現を「令和の最大の政治改革」と位置付けている。岸田文男首相の祖父、父は衆院議員を務めていた。野田新代表は「ジュニア（息子）に委ねると四世だ。ルパンでも三世までだ」と訴えていた。

野田新代表は今回の代表選挙でも、「親の地盤、看板、鞆を引き継いで、当たり前のように世襲政治家がいつぱい出る世の中を変えていきたいと思う。政権交代こそが、それらの改革を実現する第一歩です」と訴えていた。

自民党総裁選の候補者9人の中、5人が世襲であり、4世が2人もいた。石破新総裁も世襲だ。

野田新代表は、自らをドジョウ、世襲議員を金魚に例える。自民党を「やたら改革もどきを言っている。世襲の多い金魚たちに立ち向かっていくドジョウでありたい」との言葉は効き目があるのではないか。

自民党には5世議員までもいる。野田新代表の世襲議員批判は多くの国民を頷かせるものがある。そして、保守系で論客の野田新代表と石破首相の国会論戦は面白くなる。

厳しい安全保障環境

「露機侵犯後 空域に2時間 防衛相 侵入3度『挑発的』」(9月25日の産経新聞)。

「本原稔防衛相は24日の記者会見で、ロシア軍哨戒機による日本の領空侵犯について、3度にわたって領空に侵犯したことや侵犯後2時間以上も侵犯空域にとどまっていたことから『挑発的な行動と考へてもおかしくない』との分析を示した。防衛省内にはロシア側の目的に関し、哨戒機の飛行経路などから中国軍との

合同演習に関連した対潜水艦の訓練だったとの見方が浮上している」とある。

この産経新聞の『論点』で河野克俊元統合幕僚長は「今回のような挑発は今後も続くと思われる。

中露は『エスカレーション・ラダー(危機のはしこ)』を一段上がったと見るべきだ。政府は『遺憾の意』を示すだけでなく、多国間で共同演習を行うなど実際の軍事的行動で決意を示すことが重要だ」と指摘している。

我が国は、飽くなき領土欲で、周辺国に脅威を与える軍国主義の中国、ロシアに隣接している。引越はできない。

我が国を第2のウクライナにしてはならない。

最近、中国による我が国に対する領空、領海侵犯も続く。拉致国家でもある北朝鮮は狂ったように、弾道ミサイル等の大量破壊兵器開発を続けている。

これに対し、我が護衛艦が初めて台湾海峡を通過して、自由に航行できる国際水域、我が領海、領空を守り抜く毅然とした決意を示した。防衛力整備は待ったなしである。

日本防衛の手かせ足かせとなつていく占領軍製の憲法の見直しも喫緊の課題である。

短命政権になる心配

あるアメリカ政治研究者は「米大統領選はハリス副大統領で決まりだ。トランプ前大統領で決まりだと言ふ奴はインチキだ。わからないが正解だ」と言っていた。

次期大統領との付き合いは厄介だ。特に、アメリカ第一主義のトランプ前大統領は取り扱いが難しい。

戦後最大の安全保障上の危機にあるが、うちには超少子化対策という課題もある。こんな非常時の日本の舵取りをする船長の任務は重い。

しかも、新総裁には、派閥という支持基盤はない。来年は参院選がある。新政権による擬似政権交代の効果、新首相への祝儀も長くは続かない。

田中角栄首相は晩年、「後藤田正晴(官房長官)クラスが15人いれば、政権は保てる。国家を経営できる」と言っていたが、石破首相はそういう自前の人材を抱えていない。「新政権は短命政権になりそうだ」との声がある。